跡見学園マネジメント学部紀要　第２号　（2004年3月15日）

方法としての習慣

L'habitude comme méthode

村　松　正　隆

要　旨

18世紀後半から19世紀前半にかけてのフランスの哲学者、生理学者たちの課題の一つは、人間が行う「生命的活動」と「精神的活動」との割り振りをいかに行うか、また両者の関係をいかに理解するかにあったといえる。生理学の発展によって、「精神」と「物質」という伝統的な秩序の間を占める新たな秩序として「生命」が立ち上がった時期において、カバニス、あるいはビシャといった生理学者たちは、コンディヤックの感覚論を受けつつ、生命現象の秩序を通じて思惟の現象を理解するという道筋を経て、思惟の現象を理解しようとした。これは、生理学において対象的な形で取り出された概念図式を、思惟の理解のためにアナロジカルに転用したものと言える。他方、メーヌ・ド・ビランは、コンディヤックやカバニスの思想を受け継ぎつつ、「生命」と「思惟」との関係性を論じる道筋を、別途に開発しようとした。その道筋とは、両者に共通する現象である「習慣」を媒介とすることで、「生命」と「思惟」とに共通する特徴を見出しつつ、両者の区分を引くというものであった。その結果見出されるのは、「生命」と「思惟」とが単純に対立するものではなく、「思惟」がときに「生命」のもたらす効果に対立しつつも、思惟としての取り分を確立するために、何かしら「生命」に似ていく部分がある、そうした両者の錯綜した関係であった。

１．問題の見通し

「生きている」ということと「考える」ということはどれほど似ていることなのだろうか？ここでは「生きている」ということで、「私」にも「他の人間」にも、さらには「動物」にも共通するある存在の様態、そしてこれらの存在様態を特徴付ける、例えば栄養摂取と排泄、覚醒と睡眠とに支配された活動のリズム、周囲の環境への適応といった事柄を考えてみたい。また、「考える」ということは、さしあたって「人間」に固有の現象として捉え、主として言語（ないし記号）を媒介とした、問題の設定並びにその解決の能力として捉えてみたい。いずれの様態も

「私」という主語に対して述語付けることができるという意味では（「私は生きている」と「私は考える」という言明は、いずれも有意味である）、両者は互いに似たものではないのか、とも思う。

他方、「考える」という営みは「生きている」ということを必要条件とするようにも思える。つまり、「生きている」わけではないものに対して「考える」という術語を与えることには何かしらの違和感を覚えるところがある。例えば私たちはコンピューターが「情報を処理する」とは語るが、コンピューターが「考える」という言い方には、何かしら違和感を覚える。そうした事態に思いを致すと、あるいは「考える」という営みはやはり動物（ときには植物）などと共通する機能の総体としての「生きていること」を有機的な条件とするが故に、やはり両者には何らか似たところがあるのではないか、という見通しを立てることができる。

もっとも、事態をもう少し追いかけていくならば、私たちの行為の各々を、二者択一的に「生きている」ということと「考える」ということに割り振ることは、難しいことのようにも思える。例えば、「食べる」という現象をそれ自身で捉えるならば、それはやはり動物などとも共通する「生きている」ことに割り振られうるのだが、しかし「食べる」ことを巡ってなされる食物の生育への配慮、貯蔵や物流への配慮、翻って、何を食べるのかといった栄養への配慮、といったものどもは、優れて「考える」ということに割り振られる事態であると思われる。

いずれにせよ、「私」、あるいは「人間」と呼ばれるものどもの織り成す「活動」のうちで「考えること」に基づく部分と「生きていること」との基づく部分とを選り分け、両者の働きを分析し、あるいはまた両活動に対して与えられる諸観念にいかなる相似と差異とがあるのかを浮き彫りにすることは、その労苦に値する主題であるように思われる。

2．簡単な歴史的回顧

ところで「生物学」という言葉が成立した時代、つまり、「生きていること」それ自体が「学」の記述対象であるということが一般的な通念として受け容れられ始めた時期である、18世紀後半から19世紀前半のフランスの哲学界をリードした人々もまた、先に掲げた「生きていること」と「考えること」との間にある相関がいかなるものであるか、を論じようとしてきたといえる[(1)]。

即ち彼らの議論においては、「人間」を一つの頂点とする生物の階梯に共通する様々な機能が、（「人間」の生命を一つの参照軸としつつも）まさに「生命」を特徴付けるものとして取り出され、かつこれら諸機能を司るものとしての「生命」が、「物質」とも「精神」とも異なった秩序にあることが言われた上で[(2)]、「生命」と「物質」ないし「精神」の概念との関係が論じられる。そしてそのためには、「物質」とも「精神」とも異なる秩序にある「生命」が、人間の生を特徴付けるものとして取り出されるということが、言わずもがなのことではあるが、やはり必須

の作業であった。

多少歴史的な進展を見ていくなら、モンペリエ生気論学派の代表的人物であるバルテーズは、「生きていること」を統べる生命の原理を次のように捉える。

「人間の学における私たちの探究の主要な主題は、人間を活気付ける生命原理の諸決定ないし諸法則についての認識である。私はこの生命原理を、生命並びに病の諸現象が示す、最も一般的で最も高次の秩序に属する経験的原因である、と見なす。」(Bartehz, 1778, p. xviii)

バルテーズは、「生きている」ことを独自の現象の秩序として立ち上げ（つまり物理的諸現象には属さないものとして立ち上げ)、これらに統一する「原因」があることを想定して、これを「生命原理」の名前で呼ぶ。つまり、「生命」が「物質」とは異なる秩序にあることを強調する。もっともバルテーズは、「生命並びに病の諸現象が示す」「経験的原因」である「生命原理」と、思惟する能力との関係は余りに複雑であるので、いったん脇に置いたほうが良いと勧告する。つまり、「生命」の秩序に割り振られる事がらと「精神」の秩序に割り振られる事がらとが、人間の生においていかに絡み合っているかを解きほぐすことは極めて困難であるので、一度棚上げにするように、と勧める。

「人間の生命原理は恐らくは、その知性並びにその諸器官と密接に結びついている。しかしこの原理の力をよりよく認識するためには、これらを、思惟する魂の触発、並びに単純な有機的身体の触発からは切り離して考察する必要がある。なぜなら余りに複雑な主題の研究においては、人間精神の弱さの故に、こうした抽象が必要となるからである。」(Bartehz, 1778, p. 5)

バルテーズは、「生命原理」を原因とすると想定される諸現象と人間の知性の諸現象とが密接に結びついていることは押さえつつ、両者の混在する現象は余りに複雑であるので、まずは両者を切り離して考えることがある、と勧告している。

こうしたバルテーズの勧告を押さえた上で、一世代後のカバニスやビシャといった人びとの思索に目を転ずると見えてくるのは、バルテーズが一度探究からは切り離すべきだとした「生命原理」と「知性並びにその諸器官」との結びつきを、「生命原理」（ないしこの言葉を捨て去るにしても、少なくともバルテーズが念頭においていた「健康並びに病の諸現象が示す」「経験的原因」）に重点を置き、あるいはこちらの側から理解していこうとする姿勢として理解することができる。

例えばカバニスは、「考える」ということの理解を少なくとも比喩としてではあるが、生命的活動性を用いた言語で記述する。

「生きるとは諸印象を受容すること、そしてこれらの諸印象が引き起こす運動を実行することに他ならない。」(Cabanis, 1802→1956, p. 450) と述べるカバニスは、「生きている」という事態を、「生きている」ことに関わる諸器官が何らかの印象（その起源が身体の外部にあるか内部にあるかは、カバニスは問わない）を受容し、かつその器官の独自の法則に従って適切な運動を行うこととして定義する。そして、「考える」ということもまた、この「生きていること」の定義の大枠にはめ込みつつ語ることになる。

つまり、カバニスは「考える」ためにはそのために器官が必要であるということを強調し、その器官である「脳」の印象受容と運動の決定という事態に、思惟を論じるべき道筋を位置付ける。

「これ【思惟の器官が脳であること：引用者註】はちょうど、胃腸が消化作用のためのものであり、肝臓が胆汁を濾過するためのものであり、耳下腺、顎腺、舌下腺が唾液を分泌するためのものであるようなものである。諸印象は脳に到達すると、脳を活動状態に置く。これは栄養物が胃に到達すると、胃液の大量の分泌と消化を促進する運動を引き起こすのと同じようなものである。脳の固有の機能とは特殊な諸印象を知覚し、これらに記号を付与し、様々な諸印象を結びつけ、これらを相互に比較し、そこから判断と決定とを引き出すことであるが、それは、胃の機能が、胃の活動を促進する栄養物に働きかけ、それらを分解し、その分泌するものを我々の本性と同化させることであるのと同じことである。」(Cabanis, 1802→1956, p. 195)

このように、思惟することがいかなるものであるかを語る議論は、思惟の器官について語ることへと転移され[3]、悪名の高い「私たちは同等の確実さをもって、脳はなんらか諸印象を消化するのであり、脳は有機的に思惟を分泌すると結論付ける。」(Cabanis, 1802→1956, p. 196) という言葉が発せられる。

こうしたカバニスの議論の構図を一言で述べれば、「対象的に把握された生命機能のアナロジカルな転用による思惟機能の理解」ということができるかもしれない。カバニスは対象的に捉えられた（つまり、観察する主体が自ら以外の諸々の生命体に対して行う観察をもとにした）「生命現象の研究、あるいはそうした諸現象の真の連なりの方法的探求において到達する最後の項」としての「感覚性」(Cabanis, 1802→1956, p. 142) を見出し[4]、この感覚性の特徴として「諸器官が印象を受け取り、運動するようにと決定付けられる」ようにする、という部分を取り出して、しかる後にこれを思惟する器官である「脳」にも適用する、という形で、「考える」ということを理解する（ないし理解したとする）。

次に、カバニスと比較的同時期に生き、生理学や病理解剖学に多大な功績を残したビシャについて簡単に触れておこう。

彼は、生命を「死に抗う諸機能の総体」(Bichat, 1800→1822, p. 2) として定義した上で、生命を「動物的生命」と「植物的生命」とにわけ、かつこれらの生命を特徴付ける機能としての「生命特性」を取り出した上で、両者の様々なあり方が整理する。

つまり、「動物的機能」としては、外的感覚作用、移動作用、発声作用が取り出されて「動物的生命」に割り振られ、他方で残りの生命作用はほぼ「植物的生命」に割り振られつつ、両機能の関係が論じられる[5]。

ところでビシャは、自らが取り出した諸生命特性と「精神」に関わる事がらは殆ど論じないのだが（少なくとも彼の『生と死に関する生理学的諸探究』の第1部には、「思惟する」という言葉は登場しないようである)、しかし、人間的と形容されるであろう諸活動を、動物的生命の延長線上に位置づける。

「人間がこれほど偉大であり、自己を取り巻く諸存在者に対してこれほど優越しているのは、動物的生命によってである。動物的生命によって人間は、科学、芸術、そして私たちが物質について表象する粗雑な諸属性からは遠く、精神性について抱く崇高なイメージの近くに人間を位置づけるすべてのもの、これを自らのものとする。工業、商業、すべての立派なもの、諸々の動物が留まっている狭い圏域を拡大するすべてのものは、外的生命【動物的生命のこと：引用者註】の持分である。」(Bichat, 1802→1822, p. 48)

いわゆる人間を他の動物から差異化すると思われる「工業」「商業」といったものもやはり、動物的生の延長線上に位置づけられるわけだが、そうすると、やはりカバニスと同じように、対象的な形で取り出された「動物的生」を司る論理を通じて、「人間的生」を司る論理を見る、ということが探求の道筋となるだろうことが予想される（もっともこれは、ビシャ自身がこうした探求の道筋を辿ったことを意味しはしない)。

カバニスにせよビシャにせよ、人間が他の「生命」を持つとされる諸存在と共有する諸機能を一度取り出した上で、その機能と類比的に、ないしその機能の延長線上に「考える」ということを捉えていく姿勢は共通している[6]。

これまで取り出してきたのは、人間が「考える」ということがいかなることであるのか、これを取り出すために、「生きている」ことがいかなることであるのかを探究することに視点を転じ、「生きていること」に参与していると想定される諸器官の機能様態の特質を「考える」ことの理解へと転用する、という論理の道筋であった。「考えること」が「生きていること」の延長に位置付けられるとするならば（そして私たちは通常そのことを恐らく疑いはしないが)、このような論理の展開（「生きていること」の論理を「考えること」の論理に持ち込むこと）も受け容れられるものではある。

しかし、「生きていること」と「考えること」との関係を明らかにするという営みには、こうした方向性とはまた別の進み方もあるように見える。

例えば、「生命」を巡るとされる諸現象と「精神」を巡るとされる諸現象と、両者に共通する特質を取り出し、この特質と当該現象との関係の差異を吟味することにより、両現象を区分けする特質を明らかにする、という作業は実り多いものではないかと思える。

たとえば、人間が覚えるある種の感情は人間が「生きている」ということに由来するものでもありながら、さらには「考える」ということに由来する部分もあるように思えるのだ。あるいはある人びとは、「生命」に割り振られる諸現象と「精神」に割り振られる諸現象とに共通する特質として習慣を取り出し、「習慣」が両現象に対していかなる影響を及ぼすことができるのか、これを契機としながら思索を進めていく。

つまり、「習慣」という現象は明らかに、「生命」に関する現象にも、「精神」に関する現象にも関わるものであるが、しかし「習慣」がこれらの秩序に及ぼす影響は異なっている。この異なりを出発点として考察を進めることにより、「生命」と「精神」の両秩序に共通する構造と差異とが、「生命」の現象の特質から出発して「精神」の現象を理解しようとする場合とは、異なった形で見えてくるのではないか、という見通しも存在するのである。

さて、このような見通しを立てたときに、メーヌ・ド・ビランの著作、『思惟能力に及ぼす習慣の影響』（以下『習慣論』）に向かう一つの視角が明らかになる。

3．『習慣論』の射程

哲学史においては、しばしば偶然的な状況が後世に残る著作を生み出すことがあるが、ビランの『習慣論』も、その代表的な例として挙げる事ができるかもしれない(7)。この著作は、学士院のコンクールによって提出された、「習慣の思惟能力に対する影響を決定せよ」という課題に応じて書かれるという、外的な要因によって書かれたものでありながら、「習慣」という本質的な要因を扱うがゆえに、人間における「生きていること」と「考えること」との間への諸現象の割り振りが、かなり鋭い形で成功している。

また、ビラニスムの時期移行のビランは、「有機的な身体機構だけに固有な習慣という大法則」（A, VI, p. 60）といった言葉遣いを用いていることで専ら「習慣」をいわゆる「動物的生」の側にのみ割り振っているが、『習慣論』の時期のビランは、「考えること」に属する習慣を論じることによって、「生きている」ことと「考えること」との間の錯綜した関係を抉り出すことに成功しているように見える。

その著作のうちにおいてまず、方法論的に本質的な箇所を見ることとする。ビランは自らの議論を、これまで精神の現象を巡ってなされてきたコンディヤックからイデオロジーに至る流れに位置付けることは躊躇わずにいながらも、他方で彼らの述べる「感覚」という言葉が広すぎるこ

とを批判した上で、新たに別種の言語を導入する。

「私は、印象という語で、生命体のある部分に対するある対象の作用の結果を理解する。対象とは、印象の何らかの外的あるいは内的原因である。この印象という言葉は、私にとっては、通常の意味理解において感覚という言葉によって理解されているものと同じ一般的意義を持つことになろう。」(A, II, p. 132 note**)

では、広がりすぎた「感覚」の概念を「印象」という語で呼びなおすことはよいとしても、これをどのように差異化していくのか？

ビランは『習慣論』の結論部で自らのとった道を回顧しつつ次のように述べる。「生理学者たちは生きた力を、感覚的及び運動的なものに区別する。私の主題の素材を省察するうちに、私は同じ区別を印象と観念の分析にも導入するべきだと認め、あるいは認めたと信じた」(A, II, p. 283)

「生理学者たち」という言葉が誰を指すかについては、恐らくバルテーズやカバニスを考えることができるだろうが[8]、ここで重要な事柄は、ビランにおいてもやはり、生理学的所与を説明するために導入された原理が、心理的な所与を説明するために、類比的に転用されているということである。

ビランはこの区別の導入について、別の箇所で次のように述べている。

「今日生理学者たちが感覚的力と運動的力の起源の同一性ないし原初的統一を認めているにしても、彼らもやはり、それらの力が協力する有機的諸現象においては、この二つの力の産物を注意深く区別する。同じ区別を哲学的分析に導入することによって、多くの曖昧さを取り払い、思惟の現象をより明晰な視点において提示することができるだろう。私が間違っているかは、この覚書の続きを見ていただきたい。」(A, II, p. 136, note** ：強調は引用者による)

一方で「感覚性」への還元を重視するカバニスに配慮を行いつつも、メーヌ・ド・ビランは思惟することを巡る能力としての知覚と感覚との区別を、生理学での「運動」と「感覚」との区別に乗っ取りながら行う。ここでも先に見たように、カバニスやビシャの行った、「生きていること」に関わる現象の特質としての「運動」と「感覚」とがそのままアナロジカルに転用されていることに注意したい。

もっとも、ビランの記述が興味深いのは、思惟能力の分析の糸口としては生理学的な用語からのアナロジーを用いながらも、その最終的な正当化は意識という審級でなされている点である。即ち、「感覚」と「運動」とを巡る最終的な記述は以下のものである。

まず、感覚について。

「私が身体の内的なある部分に苦痛やくすぐったさを感じるとき、あるいは一般的に気分のよ

さや悪さを感じるとき、暑いときや寒いとき、心地よいあるいは不快な香が生じるとき、私は感覚する、私はある仕方で変容を受けている、という。私が自らの変容にいかなる力も行使していないこと、この変容を中断したり変化を加えたりすることができないことは明らかである。従って私はまた、私は受動的な状態にありあるいはそう感知する、と述べる。」(A, II, p. 134)

次いで運動について。

「私が四肢の一つを実際に動かす、あるいは私がある場所から別の場所に移動するとしよう。そして、私自身の運動から生じる以外のすべての印象を捨て去ってみよう。すると、私は前の場合【感覚する場合】とは極めて違う形で変容を受けている。まず、私の変容を創造するのは私であり、私はこれを開始することも中断することも、あらゆる仕方で変化を加えることもできる。そして私が自らの活動性について抱く意識は私にとって、変容それ自身と等しい明証性を持つ。」(A, II, p. 135)

このように、「感覚」と「運動」との意識の現われは、それぞれ対象的な説明を要求するのではなく、意識という審級で確立されている。わけても運動性の取り出しは、意識の審級において、「変容それ自身と等しい明証性」をもって与えられている。私の持つ運動性を語るために、生理学的な審級に訴える必要は無い。

ではこのような区別は、それ自身で自足するものだろうか？　そうとも言えるし、それだけに尽きないところもある。先に引いた文章のうちでビランは次のように述べていた。

「私が間違っているかは、この覚書の続きを見ていただきたい。」(A, II, p. 136, note**)

すると、導入された運動と感覚との区別、さらに言えば人間的思惟における能動的能力と受動的能力との区別は、この分割から導き出される帰結と現実との照らし合わせによって確証されるということになる。逆に言えば、ビランが『習慣論』で行う記述が現実と異なるのであれば、今問題となっている区別は消え去ることになる。

そうすると、ビランは今問題となっている区別を、次の三重の保証のもとで行っていることになる。一つには、生理学的概念のアナロジカルな転用、二つには意識の明証性による保証、そして三つには、仮説演繹法的な概念の吟味、ということになる。

ところでこうしたビランの推論の道筋の分析は脇において、これまで出てきた「運動」と「感覚」との区別において注意を払っておきたい点が一つある。先に引いた文章の中で、ビランは

「感覚」を、「私」が専ら受動的に被るものとして立てた後に、この「私」が受動的に被るものの原因として、ある種の生気論的な記述を行う。即ち、これらの感覚は、「特殊な法則によって自らを導き、調性を受け取るというよりは与えるところの器官、この器官に特有の実在的活動」によることが「推論によって」明らかなのであり、「この純粋に内的な活動は自我において自我なく実行される」のであり、「従って疑いもなく感覚的活動性（activité *sensitive*）が存在する」。（A, II, p. 135）

ここでビランが行おうとしていることは、人間の意識に現れる諸々の「印象」のうちで、特に「生きていること」に割り振られる現象を析出するための概念を整備することであろう。即ち「印象」のうちでもある種のものは「自我なく実行される」ものでありながら、「自我において」やはり実行されるものであり、そうしたことから「自我において自我なく」働く、独自の行動の法則をもった「感覚的活動性」にその原因が割り振られる。

すると、習慣が「生命」に対して及ぼす影響は、「感覚的活動性」に及ぼす習慣の影響を測定することに繋がり、他方で習慣が「精神」に及ぼす影響は、習慣が「運動」に及ぼす影響を測定することによって明らかになるのではないか、という見通しが立てられる。

次なる課題は、取り出された「運動」の能力と「感覚」の能力とに対して「習慣」が及ぼす影響を見て取ることである。

4.「感覚する能力」と「運動する能力」への習慣の影響

ビランはごく日常的な経験から出発して、感覚能力を統べる「感覚的活動性」の力の一つを抉り出す。私たちは例えば強烈な刺激物を感覚したときに、最初は激しく触発されながらも、この感覚を繰り返し被ることによって、徐々に触発が弱まっていくということがある。ビランはこうした側面を、やはり「感覚的活動性」それ自身の働きに帰する。

「連続して与えられた私たちの感覚が弱化していくのは、人がいろいろな種類を想定する機械的（つまり物質的）原因に依存するものではない、これは、これらの感覚を引き起こすのと同じ原理の活動性の結果なのだ。」（A, II, p. 167）

一見そのまま読み流しがちな文章であるが、しかし重要な論点を含んでいる。先の文章で、感覚を引き起こす原因が「感覚的活動性」に割り振られたわけであるが、感覚の弱化もまた同じ「感覚的活動性」の力によるのである。つまり、私たちを感覚的に触発する原理と、その触発を弱める力とは、確かに同じ原理によるのである。

こうした原理の働きは特に、温度の変化に対して生体が均衡を回復する活動に、最もはっきりと現れている。「私たちが今しがた述べた均衡、並びにこの均衡を立て直すための感覚的原理の

働きは、触覚的感覚、わけても暑さないし冷たさの感覚に対応する印象においてはっきりと現れる。」(A, II, p. 169)[9]

習慣が感覚的活動性に及ぼす影響は、活動性の系全体が均衡を回復する能力を強めることによって、ある特定の感官が覚える触発を弱めていくことにある。

他方で、先に取り出された「運動」の力への習慣の影響は次のように記述される。

「この最後の進歩から生ずる様態や結果を吟味するために、習慣が、どのように行使されたものであれ私たちの運動能力に及ぼすところの、主要で必ず起こる、切り離すことのできない二つの結果を観察することとしよう。1．すべての意志的運動は、頻繁に繰り返されると、徐々に容易かつ迅速、正確になっていく。2．努力、あるいは運動から結果する印象は、迅速さや正確さ、容易さが増すのと同じ割合で弱まっていく。そしてこうした容易さなどなどが最高の段階に達すると、運動は、それ自身ではまったく感じられなくなり、運動が協力した産出物、あるいはこれと結びついた印象によってのみ意識に現れる。」(A, II, p. 178)

ビランによれば、一方で感覚の引き起こす触発の低下、他方で運動性の迅速さ、正確さ、容易さの増大が、人間的な行為が成長する条件ということになる。簡単な例を挙げよう。例えば、ギターのコードをうまく弾けるようになりたいとき、人は慣れぬ手つきでギターを操り、狙ったコードを弾くための手の型を獲得しようとする。最初は、手がなれぬ形に対して抵抗し、いわば触発し、その引き起こす痛みの故にコードを弾くことはできない。しかし、系の均衡を回復しようとする感覚的活動性の傾向性の故に、手が感じる触発は徐々に低下し、ついには殆ど感じられないものとなる。他方で、手が狙った型に至るための運動は、徐々に「迅速さ、正確さ、容易さ」を増していく。このようにして、人はギターのコードを弾くということを修得していく。

こうした事態をビランは端的に次の言葉に纏める。

「これこそが、無限に相互に結びつき迅速で容易になる諸作用、諸運動の習慣の偉大な法則である。これは即ち、努力の弱化と消失、活動における無感覚性、そして活動の結果の明晰さと正確さである。」(A, II, p. 187)

一言述べておけば、この図式は記号の操作であるとさし当たって想定される「考える」ということにもやはり当て嵌まる。記号の最たるものである言語を例に取れば、これもやはり、発声という運動（ないし何らかの身体運動）に基礎を置くものである。発声ないし類似した身体運動によって適切な行動を行う、ということが「考える」ということであるとするならば（そしてこれ

が「考える」ということを尽くさぬにはしても、少なくともその一面は言い当てている)、上記の図式は確かに「考える」ということにも当て嵌まる。

すると「考える」という働きは、「生きている」ということに割り振られる感覚的活動性の活動による触発の低下、並びに運動性の向上といったことを条件とし、その意味で、「生きている」ということを発現の条件とするものである、という語り口が正当化されるであろう。

しかし、感覚的活動性と運動との関係は、それに尽きるものではない。

他方で、運動性は感覚的活動性の活動を条件とするがゆえに、徐々に無感覚なものとなるのであり、その意味で、意識を離れていくものであり、結果として意識の統御を離れた、言うなれば機械的なものとなってしまう。

この事態をどのように考えるべきか?

5．病としての習慣[10]

前節で見たように、「習慣」とは、触発を低下させつつ運動の迅速さや正確さを容易にする、人間的行為、ひいては思惟の発現のための条件であった。しかし、これらの効果はその性格の故に、つまり行為を無感覚のものとしていくがゆえに、人間的思惟の条件である運動性を覆い隠す傾向にある。

「このように、また私たちの運動する力を、それらが作り出す産物の極度の容易さのうちに覆い隠すことで、習慣は、意志的運動と非意志的運動との、経験による獲得物と本能の作用との、感覚する能力と知覚する能力との区別の線を消し去ってしまう。」(A, II, p. 179)

習慣は、行動を無感覚にしていくために、その行為を構成する諸成分の分割をも無感覚なものとし、わけても、行動を行動として成り立たせる本質的な成分としての運動性をも覆い隠してしまう。行動、ひいては思惟を成り立たしめる運動は、反復されることによって、徐々に感知できないものとなっていく。これは日常の経験がはっきりと教えることだ。運動は容易になることによって、私たちの能力を拡大する。しかし他方、ここで生じる無感覚さは、自分が実行している運動がまさに自己の統御にあることを忘れさせ、さらにはこれらの運動の実行を、機械的かつ自動的なものとしていってしまう。特にこれは、何らかの状況に対して鸚鵡返しに反応する人間の傾向、わけても決まりきった言葉で常に反応してしまう人間の傾向などに、はっきりと現れている。

あたかも病を診断する医者のごとく、ビランは習慣が記憶を機械的なものにしていくことを記述する。

「結局、発声や記号の（機械的）想起の容易さは、頻繁に反復されることから生じ、その最も有効な機能を変化させ（それが既に第一の記号の機能を無効にしたのと同じ仕方で）、想像力が歯止めなく働くようにしてしまう。」（A, II, pp. 287～288）

発声は容易であるが故に頻繁に繰り返され、その結果、言語記号は容易に獲得されるようになる。しかし、こうした言語記号の獲得は、言葉の獲得によってのみ言葉が名指す事態を把握したとする幻想を生み出すがゆえに、思惟にとっては悪影響を及ぼす。言葉を発するだけで、すべてを理解したかのようになる傾向性を、人間は持つ。

「言語が無意味な表現や偽りの奇妙な判断を用いて来たことは、理性にとって何たる不幸であることか。継続的に反復されることによって、それらは耳と声の習慣となり、以来それらの術語は信用を得、この信用のためにあらゆる疑いは遠ざけられ、これらの術語も最低の検証すら受けず盲目的に通用するようになったのだ。長期にわたってそれらを表現する記号が反復されたために、納得しがたい不条理が存在しないこと、これぞ言葉の習慣というものである。」（A, II, p. 289）

「意味をもたない同じ術語の反復にのみ基礎をおくのなら、私達の判断は機械的である。」（ibid.）

人は言語を獲得することによって、「意味を持たない同じ術語」を繰り返すだけの判断を下すようになる。こうした判断は「機械」の働きに比すべきものであり、常に同じ反応をすることで、変化する状況に対して対応しようとするものである。そしてこうした事態はあからさまになることはなく、むしろ意味を持たない言葉の繰り返しこそが、逆にその言葉が何かしら意味を持つという確信を人にもたらす、という逆説的な事態を、ビランははっきりと診断する。

「この決まり切った信用、機械的な信頼は、反復されるにつれて正確に増加していく。」（ibid.）

このような「病」、決まりきった言葉を繰り返し、変化する状況に対して常に同じ言葉を繰り返すことによって対処しようとする機械的記憶、このような傾向から、人はいかにして抜け出すことができるのか？　病の比喩を用いて言えば、習慣がもたらす、状況への対応の柔軟性を失い機械的にしか反応することができなくなる、という病に対する処方箋はいかなるものなのか？

こうした機械的な状態から脱出することを可能にする能力のこと、思惟の取り分を明確にし、思惟が持つことが要望される柔軟性を可能とする能力を、ビランは「反省」と呼ぶ。だが、「反

省」という治療薬は、習慣のもたらす病に対していかに処方されるべきか。

6.「反省」の取り分

思惟する能力を最もよく特徴付ける「反省」について、『習慣論』の中では次のように記述されている。

「もし人間のうちに反省の能力、自分を取り囲むすべてのものに反応し、自らを変革する能力があるとしても、この権能は習慣や、反省が基礎付けられている第一の運動、あるいは自然的記号の容易さや自発性によって覆い隠されている。反省が潜在的なものから実効的なものへと移行するためには、以前は習慣によってなしていたことを意図的にやり直す決意をしなければならない。反省の用いる記号の源泉に遡り、その機能を見極め、意志の行為によってこれらを新たに打ち立てなければならない。これらを（反省的な）繰り返しによって、感官の諸印象、思惟の産物、統覚するもののすべて、自らのうちや外に感じるものすべてと結び付けなければならない。」（A, II, p. 217）

「知的能力」が行うことは、「習慣」が行ってしまったこと、基本的に「感覚的活動性」に支配力を及ぼし、物事を無感覚にすることをその特性の一つとする（そして物事を無感覚にしていくとは、正に思惟に逆らうことである）「習慣」の営みを、意図的にやり直すということである。その意味で、反省が行うこととは、実は「生」を特徴付ける「感覚的活動性」の働きを、模倣することではないか、という推測が成り立つかもしれない。

事実ビランは次のように述べる。「反省は個体に、個体はかっておのずから、あるいは同じ状況の反復によってなされていたことを意志的に模倣することのみなすべきであることを指示する。」（A, II, p. 218）

しかるに「模倣する」とは、正に感覚的活動性に割り振られる事がらではなかろうか。

ビランは、模倣を、感覚的活動性に属する本能に割り振り、次のように述べている。「感覚的で運動的でもある存在者は、本能的に模倣するものである。」（A, II, p. 234）また、思惟するために必要が言語獲得の条件としての発声器官の成長も、個体が周囲に生じる音を模倣する、ということが、まさに条件とされているのであった。個体が周囲の音を模倣することについて、ビランは端的に次のように述べている。「ここには他のどんな運動以上にも特筆すべき模倣の本能がある。」（A, II, p. 144）行動、思惟の条件たる「運動性」の成長は、実はすでに「かっておのずから」「なされていた」模倣のあり方それ自身を模倣することとも言える。

この意味で反省が模倣するのは、感覚的活動性が行う模倣の営みそれ自身を、「意志的に」模倣することとも言えるのだ。思惟は、自らを機械化するものとして脅かす「感覚的活動性」「習

慣」の働きに対して対抗するものであるが、しかし、その対抗のための手段は、一度思惟の敵としての形象を与えられた「感覚的活動性」「習慣」の活動に、己を「意志的に」かたどっていくものでもある。

そうすると私たちは、「習慣」を巡る考察を経て明らかになる「反省」のなすべき仕事、即ち「考えること」の最も本質的な取り分を、次の事柄を知ることとして纏めることができるのではないか。

① 考える、という能力が基本的に「生きている」ということを有機的な条件としていること。

② 「生きていること」の司る「感覚能力の低下」によって、思惟の出現の条件が整えられること。

③ しかるに思惟は、なおかつ生きていることに影響を受けるが故に（その最たる証拠は努力感の低下であった)、それ自身生命の受動性（生命の側から見れば能動性でもある）に影響を被り、自らの起源を忘れていくこと。たとえば状況に対する鸚鵡返しの返答などが、その最たるものであること。

④ だが、思惟はそのような「感覚的活動性」の活動を明るみに出し、かつこれを意図的にやり直すことによって、再び自らの取り分を取り戻すことができること。

⑤ 即ち「思惟」と「生命」との関係は、後者が前者の条件でもあると同時に前者を攪乱する要因でもあり、かつ「生命」とはその活動のいくばくかを「生命」が手本にするべきものであることである。

ビランは、望ましい思惟のあり方として、「思惟の節度ある気質」(A, II, p. 254) という言葉を一瞬書き付けている。この「節度ある気質」とは、「感覚的活動性」「習慣」が、自らの条件であること、そして条件でありながらも自らを脅かすものであることを知っていることを一つの条件とする。しかし、「節度ある」という言葉に籠められているのは、自らが「感覚的活動性」「習慣」に脅かされるものとしてあることを認めつつも、そこから抜け出すための力が与えられていることを知り、そしてその抜け出すための方途が、「感覚的活動性」や「生命」を戦争のモデルに従って敵視するのではなく、これらに何らか似ていくことであることを知っている、そうした思惟のあり方への誘いであるのではないか。

注

(1) 一言述べておけば、「生きていること」と「考えること」との関係ないし対立を巡る思索は、当然のことながらこの時代に始まったわけではなく、ヨーロッパの知的伝統において様々な変奏を見て取ることができる。例えば、人間のうちに「霊の原理と肉の原理との対立」を見るパウロ的な伝統は、当然ながらヨーロッパを支配する知的な伝統の一つに数えることが出来るし、後に取り扱うメーヌ・ド・ビランの思

想の中にも、この伝統は食い込んでいる。こうした発想の特色の一つは、人間的な行為を序列付ける価値基準のうちで、劣ったもの、非難されるべき（とされる）ものを巡る議論がなされ、次いで論じられている、劣ったもの、非難されるべき（とされる）行為が、動物などと共通することが言われ、これらが「動物的生」というカテゴリーに投げ込まれた上で、人間のうちにある「生きていること」と「考えること」との対立が言われる、といった観念の配置になっているように思う。それに対して本論考において論じられる生理学者や哲学者たちは、「生きていること」を一旦価値的に中立なものとして捉え、その上でそれらが（何らかの原理によるにせよ、あるいは機能の総体であるにせよ）「生きている」ということと関わる諸現象（例えば生体の内部の系の均衡回復、栄養摂取、排泄、生殖）を捉え、かつこれら諸現象を何らか理論化した上で特徴を取り出し、しかる後にこれらの特徴を、思惟の現象を理解するために用いる、という順序になっているように思える。

(2) その最も典型的な議論が、ハラーに端を発する「刺激感応性」(irritabilité) を生命特性として認めるか否か、という議論であった。

(3) この転移が正当なものであるのか？　正当であるとすれば、その正当性の条件は何か？　正当で無いとするならば、なおかつカバニスをこのような思考に誘ったものは何か？　しかしこれは本稿では取り上げる暇をもたない。

(4) もちろん「感覚性」の存在論上のステイタスが問題となるが、これについてはStaumの次の論評も参照のこと。「感覚性とはもっとも重要な生命の現象に過ぎない。ボルドゥ、フケ、バルテーズの著作におけると同様、感覚性は生理学的な未知項、あるいは「一般的経験的原因」なのだ。力に関するニュートン的な説明図式に従いながら、カバニスは、感覚性の本質についての仮説は、引力についての仮説と同じく無益であると注記している。」(Staum, p. 178) なお、カバニスの不可知論については次の言葉を参照のこと。「私たちが対象の観念を持つのは、これらの対象が私たちに示すところの観察可能な諸現象によってのみである。これらの本性、本質とは、私たちにとっては、これらの諸現象の総体にすぎない。」(Cabanis, 1802→1956, p. 197)

(5) こうしたビシャの思想については、参考文献で掲げた松永澄夫の論考を参照いただきたい。

(6) 最も、こうした生命的諸機能の取り出しのためには、実は（緩い意味での）「精神」の秩序を予め了解していることがやはり必要なのではないか、という見通しは当然のことながら立つ。しかしこの点について、本稿では詳述しない。

(7) 『習慣論』の出版に至るまでの時系列を簡単にまとめておく。学士院がコンクールの課題を出したのは、1799年10月6日である。ビランによる最初の論文は、1801年1月1日に送付される（Cf; *Au Citoyen B.*, A, XIII-2, p.245）1801年4月6日、学士院の道徳学部門は賞を誰に授与しない決定し、第二のコンクールを開くことにする（ただしビランには注目すべきという評が与えられる）。ビランの第二の『習慣論』は1802年3月24日に提出され、1802年7月6日に賞を与えられる。なお習慣論の出版時期については1802年12月というのが定説であったが、書簡によれば、10月以前には出版されていたようである。

(8) ここで言われている「生理学者」というのが誰であるのかは様々な推測が成り立つが、例として、バルテーズの次の文章を挙げておく。「生命原理のうちでは、感覚的な諸力と運動的諸力とを区別しなければならない。なぜならこれら二種類の力は、全く異なった結果を産出するからである。」(Bartehz, 1778, p. 43) また、基本的には感覚性を重視するカバニスも、ある箇所で次のように述べている。「さらにいえば、感知と運動とのこの区別、そして特にこれら両者に関係する諸能力の区別は、生理学において必要なものであり、合理的な哲学においても不便なく用いることができるが、この区別は、私たちの探究が向かいまた私たちの推論が基づくべき明確で感覚しやすい諸事実から演繹される。」(Cabanis, 1802→1956, p. 173) もっともこの文章の直前では「この区別【感覚する能力と自ら動く能力との区別：引用者註】が、より厳密な分析においては消え去ってしまうことを隠してはならない。」(ibid, p. 172) とも述べている。

(9) なお、ここでは本稿の始めでその「生命原理」についてごく簡単に言及したバルテーズが引用されている。「習慣は、突如大気温度が全く反対のところに出ても、人間が自らに固有の熱を保存する能力を与える。」Azouvi 版の『習慣論』の編者はさらに、次の箇所も指示している。「次もまた、動物の熱の産出に見られる一般的法則である。それは、習慣は、動物たちが持つ、大気状態が著しく不安定なときでも、自然な熱の安定した状態を保持することができる能力を、強化するということである。」(いずれも Barthez, 1778, p. 132)

(10) この表現は、参考文献で掲げた Lefeve の論文に習っている。この論文は、『習慣論』に現れる健康と病とのイメージを導きの糸としながら、「思惟」と「生命」との錯綜した関係を解きほぐしている。本稿はこの Lefeve の論文に基本的なヒントを得ている。

参考文献

1．メーヌ・ド・ビランの著作

メーヌ・ド・ビランの著作については、François Azouvi の編集により Vrin 社より刊行中された、『メーヌ・ド・ビラン著作集』(ŒUVRES DE MAINE DE BIRAN sous la direction de F. Azouvi) を用いた。引用に際しては、«A» の文字の後に巻数を記し、その後にページ数を記した。たとえば『習慣論』の130ページから引用を行った場合には、(A, II, p. 130) という形でこれを示した。本稿で引用したのは、次の三冊である。

II. *Influence de l'habitude sur la faculté de penser.* in. *Mémoire sur la faculté de penser.*

VI. *Rapports du physique et du moral de l'homme.*

XIII. *Correspondance*

2．その他の著作並びに論文（【　】内は引用に際しての略号）

Barthez, Paul = Josephe, *Nouveaux éléments de science de l'homme*, 1778【Barthez, 1778】

Bichat, Xavier, *Recherches philosophique sur la vie et la mort.* 1822 (4e éd.)【Bichat, 1800→1822】

Cabanis, *Rapports du physique et de morale de l'homme.* (in Œuvres Philosophiques de Cabanis., (1956.,PUF)

【Cabanis, 1802→1956】

Lefeve, Céline, «MALADIE ET SANTÉ. DANS LES *MÉMOIRES SUR L'INFLUENCE DE L'HABITUDE SUR LA FACULTÉ DE PENSER* DE MAINE DE BIRAN» in *Les Études philosophiques*, 2000, n 1

Staum, Martin S. *Cabanis : enlightenment and medical philosophy in the French Revolution* (Princeton University Press, 1980)【Staum】

松永澄夫「二つの生命と二つの生命特性（上）——ビシャの生命思想とその論理（一）」、『テオリア』第23輯、九州大学教養学部、1980

松永澄夫「二つの生命と二つの生命特性（中）——ビシャの生命思想とその論理（一）」、『テオリア』第24輯、九州大学教養学部、1980

付記：本研究は文部科学省科学研究費補助金（若手研究（B）：課題番号15720006：2003年～2005年）の助成を受けた研究成果の一部である。記して感謝する。